

きらめき 地場企業

下水道不要のトイレ製造

人の排せつ物を燃やしたり、微生物に分解させたりして、下水道やくみ取りを不要にした「自己処理型」のトイレを製造し、販売やレンタルを手がけている。いずれもおいが少なく、燃焼式は処理できる量も多いため、大勢の

ミカサ (大分市)



登山客が訪れる富士山のほか、南極基地にも納入してきた。微生物タイプは燃料代がかからず、コストが低い利点があり、工事現場などで広がっている。

仮設の事務所やトイレのレンタルで創業した三笠高志さん(69) (現相談役) が、くみ取り式のおいなどを解決しようとして開発に取り組み、1994年に燃焼式を発売した。排せつ物をためる小さなドラムが回転しながらバーナーで熱せられ、約50人分が15分で灰になる。燃料は灯油だ。

微生物を活用したトイレの普及を進める三笠社長。工事現場などに広がっている

他社にない独自商品として市場を開拓した。2014年に社長となった高志さんの長男・大志さん(39)は「処理能力を武器に、登山道などで強い需要がある」と語る。

- ▽設立 1989年
- ▽従業員 9人
- ▽売上高 1億9000万円(2017年6月期)

微生物タイプは、原油高による燃料費の値上がりを受け、先行する他社に続いて05年に投入した。排せつ物が落ちる「処理槽」は粉末状の杉の木で満たされ、モーターの力でかき混ぜながら分解する。標準型で1日あたり約50回分の排せつ物を処理でき、杉の入れ替えも2〜3年に1度で能力を保てるという。

(丸谷一郎)